



いっさいの無駄を省いた、 必要最低限のデザインの形。

形状があまりにもシンプルすぎて、最初は用途がわかりませんでした。けれども説明にしたがって実際に使ってみると、実によく考えられている。必要最低限の要素で構成されたデザインなんです。

そもそもCDやDVD、ブルーレイのような光学式ディスクはメーカーがそれぞれ開発していて、それには当然ケースもついてくる。つまりディスクと一緒に、ケースもメーカーが生産しているわけで、それゆえ我々は、ケースを単体でデザインすることを思いつかずにいた。けれども「プロッティー」はそうした固定観念に縛られず、デザイナー自身の、「こういうものがあれば便利なのに」という切実な思いが、ストレートに具現化された製品です。まさに「かゆいところに手が届く」とでも言えばよいでしょうか。

とくに「記録面だけの最小カバー」というミニマムな発想がすばらしいですね。実際われわれは日常的に、記録媒体として光ディスクを使用しています。ですからこの着眼点は、ユニークであると同時に、ユーザーとしてもとても納得できる。

評価のポイントは、日常生活の中で生じた不都合をデザインによって解決するという、正攻法の手続きが採られているところ。たとえば装着時に、ほんの少し、浮くような構造になっている。使ってみると、このちょっとした工夫が「なるほどね」と思えるんです。要は、細部までよく考え抜かれている製品ということですね。おまけにシンプルなデザインですから、生産工程上も無理がない。あっぱれというべきでしょう。

つけ加えておくと、こうした小ぶりのアイデアを素早く製品化できたのは、小回りの利く中小企業だったから、という点にも留意する必要があります。デザインの果たす役割を含め、そこにはモノづくりの大きな可能性が感じられます。

(審査ユニット長 村田智明・談)